【資料紹介】

コントン会の思い出―東彩子氏の手記より

山本雅美（船橋市教育委員会学芸員）

1952 年夏、成人学校デッサン科が中央公民館で開校した。このときの講師は中央画壇で活躍していたモダンアート所属の牛玖健治（1922－2012）であった。この講座は船橋本町小学校に移り 3 か月余りで閉講した。

同年秋、デッサン科修了生を中心にコントン会という洋画の研究会が発足した。会長は清川尚道。椿貞雄も顧問として参加した。

コントン会は中央公民館を会場に、毎週月・木の午後 7 時～9 時まで開催された。毎回大体 15～20 人が集まり、上野にあるモデルクラブから来るヌードモデルが 15 分位のポーズをいくつかとり、参加者がそれぞれクロッキーを 5、6 回行うのが通常の活動であった。休日には近郊にレクリエーションをかねてスケッチ旅行に出掛けたり、展覧会を行ったりと活発に活動し、参加者は洋画家として活躍していた渡辺正太郎、日本画を学んだ大田歳、立石秀春、工芸家では猪俣伊知郎、俳句では高浜虚子に師事した柏崎夢香など、市内の文化人が一同に会していた。

会名の「コントン」という言葉は中国古典の荘子の詩「渾沌記」からとられたものである。この故事にならって、コントン会は常に向上心を失わず精進せよ。出来上がってしまったら、そこには成長は無く、死滅したと同じことである、という意味をこめた会名であった。よって、「コントン会は永遠に卒業・修了なし」といわれている。その後 2009 年に解散するが、それまで同会には小学生から 70 歳を超える人も参加して、あらゆる年齢層の人々が集って楽しんでいたようである。

中央公民館発行の『公民館クラブ会報』（1959 年）によると、コントン会になってからは専用の指導者はいなかったが、洋画・日本画の画家が参加しているのでいつでも指導を受けられるとある。椿も初孫で長女・朝子の子の彩子を伴って度々参加していた。次ページはその東彩子氏のコントン会をめぐる回想を記した手記である。夜、公民館に集まり熱心にデッサンに取り組む船橋の人々の息遣いを鮮やかに伝える一文である。著者の協力によりここに紹介することとする。

最後に今回資料をご提供いただいた東彩子氏に感謝申し上げる。

参考文献：『公民館クラブ会報』 1959 年 中央公民館

（中略）

祖父母の家でのある晩には、夕飯も終えてから、彩子もデッサンに行くか？　と祖父が私を誘った。たちまちスケッチブックと色えんぴつを携える。

着いた先は小学校だったのか、中に入ると薄暗くほこりっぽかった。何人もの男たち――幼い私には皆お爺さんに見えた――が、何かを待って雑談している。その一人が子ども好きらしく笑いかけてき、私を笑わそうとさえする。こういうこすっからい子ども好きを私は嫌いだったから、知らんぷりを決める。ところが、私をデッサンし始めたのである。私は描かせたくなくて、頭をあっちに振ったり、こっちに振ったりした。祖父は気づいてか気づかぬのか、あいかわらずの微笑。私は、おじいちゃまの専属のモデルである、というような気が、むくむくと頭をもたげた。とは言っても、麗子ちゃん（劉生の娘の）を見習いなさいと言われて、2時間も3時間もポーズをとらされた――あのぶどうの房を頭の上からたらして食いついている絵の時でさえ――母と違って、ハイ、モデルをしてあげまちゅ、と言って、立像のポーズを決めたのは3分だったという私なのだけれど。

やっと皆が待っていたことが始まりそうである。スミマセンという声と共に、誰かが衝立のうしろに消えた。しばらくして出てきたのは、全裸の女性であった。

近所に住む画家たちが、モデル代を分担して作ったサークルだったのだろう。急に空気が締まって、えんぴつやコンテの音だけが、大きくなってゆく。私ももちろん、大真面目にスケッチブックを広げる。片手をうしろに廻した体をオレンジ色で描き、頭の上とおへその下に黒いものを描き加えると、しかしもう終ってしまった。キリンを描いた時より、時間がかからない。見廻すと、皆一様に目を上げ、見つめ、目を下ろし、手を動かす。それでいて、バレエのようにはそろっていない。

端から見ても不可思議な視線は、自分に向けられた時にはいっそう奇妙に感じられるものだ。モデルをすると、いつもの微笑を含んだ祖父の目から、笑いの影がいっさい消える。私をじっと見ているのか、そうでないような気もする。私の顔の表面のひとつずつを凝視しているようにも、内側を覗き込んでいるようにも感ぜられる。うっとうしいようなくすぐったいような気がして、ハイ、モデルは終わりでちゅ、と言うことになるのだ。

長びきそうなのは経験で知っていた。一番に終ったことを示す為、となりの椅子の上に出来上がりの絵を放り出した。微動だにしなかったモデルの目がキョロンと動いて、その中に微かな笑いが走る。

眠くなってきた私の頭の中では、どうしてだろう？　という疑問が、クルクル廻り始めている。

どうして裸で皆の前に出てくる人が、服を脱ぐ時には隠れる必要があったのだろう？

眠りこけた私を抱いて帰った祖父は、出迎えた母に、彩子？目を丸くしてたよ、と言い、ウフフと笑ったとか。

2008年秋　　東　彩子

出典：　『東彩子ヴァイオリン・コンサート　平成20年度置賜文化ホール自主事業
米沢市上杉博物館特別展「没後50年　愛情の画家　椿貞雄」によせて』
パンフレットより一部転載